特別研修

月例研究会　議事録（　5　月）

2007 年度第　2　回

報告題名　明治期後半の村社会における地方商人と繭取引－気仙郡の伊東彌助家を事例に	
報告者　佐藤文吉	日時　5月24日　午後3時～午後5時
(所属分野)資源経済学分野	場所 第7講義室
座長 田中	議事録担当者 小山田、飯塚
出席者 米倉、冬木、川島、伊藤、齋藤、両角、木谷、大鎌、石井、佐藤（章）、朴、澁谷、鹿嶋、福田、水澤、小山田、佐藤（文）、田中、鈴木、西橋、飯塚、大森、紺野、高嶋、田口、デッフィ、村松（優）	

報告要旨

養蚕農民が生産した繭の流通に重要な役割を担ったのが在方の商人である。本研究は、養蚕が盛んな仙北地帯の一角にあった明治期後半の気仙郡において、製糸工場や養蚕農民が市場経済と対峙するにあたり、これら商人が、どのような機能を果たしたのかをあきらかにすることを課題としている。

事例の伊東家は、営業製糸との活発な取引がみられ、大口出荷元としての購繭活動は村社会との関係において重要な視点といえる。また、気仙郡の蚕糸業は組合製糸に特徴があるとされており、むらの論理と商人活動の利害という視座から共同体の機能組織を検討するという方法を駆使している。

具体的には、地域の営業製糸は養蚕農民で組織され、少数の商人とともに伊東家も1株主として参加しているが、会社側と商人の繭調達や配当などをめぐるもくろみについて仮説を立てて検討している。さらに、村の繭生産高に占める伊藤家の取扱実績は商人の位置づけをはかるうえで重要であり、「組」などからの組織的な収繭方法を講じている一面もみられることから、個別取引にあたっての村社会の認知との関係などを追跡している。

質疑・応答

佐藤（章）「感想ですが、組合製紙が信州大製糸資本に圧倒されたというのは、今の集落営農経営体もそうなるんじゃないか、と心配しています。それから、村の中に組組織があるということですが、村の名前じゃなくて組の名前がつくというのが面白いと思いました。ただ、この組を機能組織とおっしゃいましたが、そこは少し疑問です」

佐藤（文）「実は、機能組織という言葉には自信がなくて、とりあえずそうつけてみました」

田中「組についてもう少し具体的にお願いします。例えば規模など」

佐藤（文）「そこは今後の大きな課題だと思います。実は、伊藤家の帳簿を調べたり実際に現地を調査しましたがわかりませんでした。組単位の実態はわかりますが、具体的な人の名前とか、組の中の人がどうしていたかとかはわかりません」

佐藤（章）「資料には組の名前が個人名でありますが、彼らをキャップとする生産集団、もしくは集荷集団が組であったということですか」

佐藤（文）「福島商人が、買継商のようなものを通して、徐々に入ってきたわけです。一次中間人は何人か人を集めなくてはなりませんでした。おそらく、そういうことをするためには、村社会の領主がいないとうまくいかなかったと思います。伊藤家もそのようにして入ってきたのだと思います」

冬木「共同体と、商人の関係というのに興味を持ちました。ただ、今回は繭が対象ですけど、他の商品作物もありますよね。他の商品作物との比較をやってみると、商品経済の進展と、再構成という仮説が生きてくると思います。そういう展望はありますか」

佐藤（文）「実は迷っています。内陸部と違い、沿岸部のほうでは自由な取引がされていたんですが、その中で、繭の比率は低かったと思います。それとの比較を本当はしたいのですが、資料が膨大なので悩んでいるところです」

大鎌「今日新しく出てきた話は、商品作物を通じた農家の組織化という点です。これについては、農村社会学などの方でいろいろ話があって、組織化の違いなどについては蓄積があります。共同体と商品作物の違いなどのことを調べてもらえれば、と思います。それから、今回は初めての報告ということですが、これからはもう少し資料を提示するなどして事実を確認しつつ論理を展開していただくとよかったと思います。」